



2025 年度新収蔵作品展

Present for You

わたしからあなたへ みんなから未来へ

2026 年 1 月 6 日(火)-2 月 23 日(月・祝)
町田市立国際版画美術館 企画展示室2

ごあいさつ

1987 年 4 月の開館以来、町田市立国際版画美術館は版画を中心とする美術館として、国内外の優れた版画作品と資料を収集・保存し、版画をテーマとする展覧会を開催してきました。また初心者から経験者まで幅広い層を対象とした実技講座や、各種の版画制作用具を備えた工房とアトリエを制作の場として開放するなど普及活動も展開し、「見る楽しみ」と「作る楽しみ」を総合的に紹介してまいりました。こうした活動を評価いただき、近年は寄贈作品の点数も増加しています。

本展では 2024 年度から 2025 年度に新たに当館に収蔵された 1605 点の中から主な作品約 40 点をご紹介します。今後も、古今東西の版画の歴史が多面的・総合的に理解できる質の高いコレクションの形成を目指し、継続して収集活動につとめてまいります。

「2025 年度 新収蔵作品展 — Present for You」とは、当館に収蔵される作品が、貴重な文化遺産として大切に保管され、未来へと伝えるべきものであり、同時に市民ひとりひとりから未来へのプレゼントでもあるという気持ちをこめたタイトルです。本展を通じて、当館の活動がさまざまな人々によって支えられ、市民ひとりひとりも美術館のサポーターであるということをご理解いただければ幸いです。

2026 年 1 月
町田市立国際版画美術館

※リストの項目は下記の通り：作者・題名・制作年・サイズ(mm)・技法・寄贈元

※会場構成の都合により、作品展示の順番はリストの順番とは異なります。

引札

引札とは、主に商店の宣伝や広告のために配られた一枚摺りの版画作品のことを指し、描かれるのは日常生活や古典物語、吉祥画題など多岐にわたる。出品作は明治後期に制作された引札で、画中には頒布元の商店名が記載されている。

No.1 に描かれるのは、新年の飾り付けをおこなう女性。掛軸に描かれる猪は干支を踏まえてのもので、本作制作年の翌年(明治 32 年)は亥年である。No.2 は五条大橋における牛若丸(源義経)と武蔵坊弁慶の対決が題材。No.3 は江戸時代の公家・中山愛親が勅使として江戸に下った際、将軍を前に抗議したという逸話に基づくもの。No.4 では、須磨に流された在原行平と、当地で出会った姉妹の松風・村雨が描かれており、伊勢物語を典拠とする。

1
新年を寿ぐ美人
1898/明治 31 年 255×375 木版

2
牛若丸と弁慶
1900/明治 33 年 257×375 木版

3
勤王中山大納言倫首明読
1902/明治 35 年 255×370 木版

4
中納言行平卿松風村雨の才智を愛で給ふ
1903/明治 36 年 255×373 木版

5
旭日鶴
1903/明治 36 年 257×375 木版

鑓崎英朋 HIREZAKI Eiho 1880-1968

明治後期から昭和期に活躍した浮世絵師、日本画家。明治 30 年(1897)、月岡芳年の門人である右田年英に入門。はじめは肉筆日本画を制作していたが、明治 33 年に東京朝日新聞社に臨時記者として入社すると、以降次第に小説の単行本や文芸雑誌の口絵の制作に比重を置いていくようになる。木版画だけではなく、石版画やオフセット印刷の下絵も手掛けた。

出品作は、中澤弘光『演藝倶楽部』第 1 巻第 6 号(博文館、大正元年)の口絵木版。同誌では、英朋のほかにも鑓木清方や山村耕花が表紙および口絵の制作に携わっている。本作に描かれているのは、歌舞伎役者・瀬川菊之丞の化粧姿である。

6
(瀬川菊之丞)
1912/大正元年 365×250 木版

1～6 渡辺紀子氏より寄贈

中国年画

年画とは、中国では古くから無病息災といった吉祥の意味を込めて制作された一枚摺り版画のことで、人々はそれを春節に飾った。年画制作とともに発展した版画技法は、日本の浮世絵をはじめ、東アジアにおける版画制作に多大な影響を与えている。

Nos.7、8 は、一家の安寧を祈願する年画。No.9 は、洞窟内を征服しようとした鼠夫婦が、最も力のある存在に娘を嫁がせようとし、最後には猫を相手に選ぶが、その猫に娘が食われてしまうという物語に拠る。No.10 も同種の物語を典拠としており、いずれも四川省綿竹市の制作。同地は年画制作の歴史が長く、淡い色使いが特徴のひとつである。

7
灶君府
1993/平成 5 年 360×246 木版

8
合家平安
1996/平成 8 年 352×247 木版

9
老鼠嫁女
2002/平成 14 年 603×427 木版

10
麻雀嫁女
2002/平成 14 年 605×427 木版

7～10 中城正堯氏より寄贈

松下サトル MATSUSHITA Satoru

1957-2023

東京出身の版画家。1983 年に東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻を修了。1981 年に第 49 回版画展・日本版画奨励賞、1993 年に第 2 回さっぽろ国際現代版画ビエンナーレ展・大日本印刷賞、1997 年に第 3 回川上澄生美術館木版画大賞展・準大賞を受賞。多数の個展とグループ展の他、女子美術大学や日本大学の講師も務めた。

初期の作品は水のうつろいや金属の光沢などを木版で巧みに表している。モチーフがリズムカルに配置された後年の作品は、さまざまなストーリーを感じさせる。

11
Waterline in the dark-1
1984/昭和 59 年頃 700×500 木版

12
Waterline in the dark-2
1984/昭和 59 年頃 700×500 木版

13
Waterline in the dark-3
1984／昭和 59 年頃 700×500 木版

14
星座を巡る 5 つの話
2013／平成 25 年 390×540 木版

15
ソラのオモイデ
2022／令和 4 年 540×390 木版

11～15 松下葉子氏、松下冬子氏より寄贈

ジョヴァンニ・パッティスタ・ピラネージ
Giovanni Battista PIRANESI 1720-1778
イタリアの版画家・考古学者・建築家。『ローマの景観』は 1747 年頃から生涯にわたってピラネージが手がけた全 135 点の連作。同地を訪れた人々の間で人気を博したことで、彼の名をヨーロッパに広めることとなった。展示作品はヴェネツィアン・グラスを学んだガラス作家の大太平洋一氏（1946-2022）が、自宅の書斎に飾っていたもの。
ピラネージ作品の特徴は、二点消失透視図法や点景の人物像の縮小などによって、建築や空間の壮大さが強調されている点である。さらに出品作では、低い視点から建物や廃墟が眺められることによって、同様の効果が生みだされている。

16
『ローマの景観』より カメナエ神殿
1773 年 470×702 エッチング

17
『ローマの景観』より ヴィッラ・アドリアーナ廃墟
1774 年 435×570 エッチング

16、17 中田真理子氏、松澤由利子氏より寄贈

J.-J.グランヴィル J.-J. GRANDVILLE
1803-1847
フランス・ナンシー生まれの画家。本名はジャン・イニャス・イジドル・ジェラル。細密画家の父から絵を学んだ後、20 歳でパリに出て細密画の工房で働く。1829 年、当時の社会における典型的な人物を諷刺し、獣頭人間として描いたリトグラフ集『当世風変身譚』を発表して注目を集める。王政政治の腐敗を痛烈に諷刺する週間新聞『ラ・カリカチュール』紙にも数多くの絵を寄稿するが、政治諷刺の検閲が強化されてからは挿絵本の制作に主軸を移した。
出品作はグランヴィルが最後に手がけた挿絵本より。著者の T. ドロールは、グランヴィルの絵に合わせて、人間に変身した花々をめぐる物語を書きおろした。

18
『生きている花々』より
チューリップ
1847 年 143×137
スティール・エングレーヴィング、手彩色

19
『生きている花々』より
オレンジの花
1847 年 158×123
スティール・エングレーヴィング、手彩色

20
『生きている花々』より
ノバラ
1847 年 136×127
スティール・エングレーヴィング、手彩色

オノレ・ドーミエ Honoré DAUMIER
1808-1879
フランス・マルセイユ生まれの画家。家族を養うため 12 歳から役人の使い走りや書店の店員として働く。仕事のかたわらで絵画を学び、当時最新の印刷技術だったリトグラフで新聞の挿絵を手がけるようになる。1830 年代初頭から『ラ・カリカチュール』に政治諷刺画を寄稿を開始し、グランヴィルとともに注目される。検閲の強化後は社会風俗の諷刺に転向。名もなき市民の生活を主なテーマとし、日刊諷刺新聞『ル・シャリヴァリ』に 4000 点以上の絵を提供した。

出品作は『ル・シャリヴァリ』に 1847～56 年に度々掲載された諷刺画のシリーズより。家賃の支払いを踏み倒して夜逃げしようとする 2 人組や、屋根裏部屋の雨漏りを傘でしのいでいる人物の姿がユーモラスに描かれている。

21
『間借人と大家』より
ちよっとばかり天井が低過ぎる中 2 階の部屋へ、なんの注意もされず案内される迷惑。
1847 年 248×211 リトグラフ

22
『間借人と大家』より
大家のやらずぶったくり野郎め…修繕は晴れた日にするもんですよとかなんとかぬかしやがって！…
1847 年 258×225 リトグラフ

23
『間借人と大家』より
こっそりお引越し。「いやどうぞお構いなく…われらが親愛なるカバソル君が具合がよくないって言うんで、家まで送ってってやろうと思うんです！…」
1847 年 256×210 リトグラフ

18～23 田中榮作氏より寄贈

ノエル＝マリー・ペマル・ルルブール
Noël-Marie Paymal LERBOURS
1807–1873
パリの光学機器商、写真家、出版者。世界初の写真術とされる「ダゲレオタイプ」が 1839 年に発表されると、写真の事業に進出。眼鏡や天体望遠鏡用レンズの製造で培った知識を活かし、カメラとレンズの販売を開始する。1841 年には肖像写真館も開き、パリで人気を博した。
出品作は、ルルブールが 1840 年代から 60 年代にかけて刊行した版画集より。発明当初の写真は複製できない 1 点ものだったため、撮影したイメージを広く伝えることはできなかった。そこでルルブールは、世界各地で撮影された写真を銅版画やリトグラフで複製し、「写真に基づく」精巧な風景版画として刊行するに至った。

24
ノエル・マリー・ペマル・ルルブール（編）
『ダゲリアンたちの世界旅行』より
フィレンツェのシニョーリア広場
1840-43 年 146×202 アクアチント他

25
『ダゲリアンたちの世界旅行』より
パリの 7 月革命記念柱
1840-43 年 283×234 アクアチント他

24、25 渡邊愛理氏より寄贈

ルフィーノ・タマヨ Rufino TAMAYO
1899-1991
メキシコ・オアハカ州生まれの画家。先住民族サボテク系の家に生まれ、メキシコシティで少年期を過ごす。1917 年から同地の国立造形芸術学校で西洋絵画を学び、1921 年に退学。国立考古博物館でアステカやマヤの古代彫刻、インディオ部族の生活を記録する仕事に従事する。同時代の政治プロパガンダと結びついた壁画運動から距離を置き、キュビズムやフォーヴィスムの影響下で絵画の造形表現を探究し、メキシコの精神性を表現した。1937 年からニューヨーク、1949 年からパリでも活動し、国際的に評価された。
出品作は、パリのデジョベール工房が刷りを手がけた円熟期の作品。デフォルメされた裸婦の豊かなボリュームや、鮮やかな赤褐色のインクは、メキシコの大地を想起させる。

26
女のトルソー
1969 年 686×530 リトグラフ

マーク・トビー Mark TOBEY 1890-1976
アメリカ・ウィスコンシン州出身で、シアトルを中心に活動したアーティスト。アメリカ北西派(パシフィック・ノースウェスト・スクール)を代表する作家の一人。そのオール・オーバーな(全体が均一なイメージで覆われた)画面から、抽象表現主義の作家の一人とされることも多い。1910年代から東洋への関心を深める。1922年から定住したシアトルでは中国人画家から中国の筆法を学び、1934年には中国・日本を旅行し、書道を学ぶ。書道を通して線による表現の可能性を追求し、一定の地色の上に白色で細い線をオートマティックに描きつける作風、「ホワイ・ライティング」を確立した。
出品作品では、複数の色が混ざり合い、線の太さや濃淡が変化することによって、動きのある画面が構成されている。

27
色の炎
1974年 422×298 リトグラフ

アドルフ・ゴットリープ Adolph GOTTLIEB 1903-1974
アメリカ・ニューヨーク出身のアーティスト。抽象表現主義を代表する作家の一人。1920年からアート・スチューデント・リーグに学ぶ。1930年にニューヨークで初の個展を開催したのち、ウィレム・デ・クーニング、フランツ・クライン、マーク・ロスコらと共に、ニューヨーク・スクールの一員として定期的に作品を発表。1935年、ロスコらとともにグループ「Ten」を設立し、1940年まで活動。
初期はアメリカの風景画を制作し、連邦美術計画にも勤務した。第二次世界大戦中にニューヨークへ亡命したヨーロッパのシュルレアリストとの交流を機に、動物・目・螺旋といった原型的な抽象表現を行なった。

28
発芽#3
1969年 563×763 リトグラフ

ロバート・マザーウェル Robert MOTHERWELL 1915-1991
アメリカ・ワシントン州出身のアーティスト。抽象表現主義を代表する作家の一人で、ニューヨーク・スクールの一員として活躍。1937年にスタンフォード大学を卒業後、ハーバード大学大学院で哲学を学ぶ。その後コロンビア大学大学院で美術史を学びつつ、絵画を手掛けた。コロンビア大学で教鞭をとった美術史家メイヤー・シャピロを通じ、第二次世界大戦中にニューヨークへ亡命したシュルレアリストと交流。オートマティズムの描法に影響を受けた。
一般にはあまり版画制作に関心を寄せな

かった抽象表現主義の作家たちの中で、例外的に版画制作に熱心に取り組み、生涯で約450点の版画作品を制作した。

29
無題
1966年 465×330 リトグラフ

池田満寿夫 IKEDA Masuo 1934-1997
旧満州国奉天市(現・中国遼寧省瀋陽)に生まれ、1945年長野市に引き上げる。1955年、蠶嘔らとグループ「実在者」を結成。蠶嘔を通じ、デモクラート美術家協会を創設した瑛九や、美術評論家でのちに当館の初代館長となる久保貞次郎と知り合う。1969年から79年までニューヨークに暮らす。1977年、小説『エーゲ海に捧ぐ』で芥川賞を受賞。
1957年、第1回東京国際版画ビエンナーレ公募部門に初入選。1965年、ニューヨーク近代美術館で日本人初の個展を開催。1966年、28点の版画作品が第33回ヴェネツィア・ビエンナーレ版画部門で大賞を受賞し、国内外での評価が高まる。出品作品は、このとき大賞を受賞した作品のうちの1点である。第4回東京国際版画ビエンナーレ(1964)で東京国立近代美術館賞を受賞。

30
夏 I
1964/昭和39年 394×360
ルーレット、エッチング

野田哲也 NODA Tetsuya 1940年生まれ
熊本県宇城市出身の版画家で東京芸術大学名誉教授。1965年、東京芸術大学大学院絵画研究科油絵専攻修了。在学中に小野忠重から木版を学ぶ。1968年以降、写真製版によるスクリーンプリントと木版の組み合わせによって自身の日常を捉えた「日記」シリーズを制作し続けており、出品作品も同シリーズの1点。日記をテーマとしているため、同シリーズの作品タイトルはすべて日付となっている。
1968年に東京国際版画ビエンナーレで大賞を受賞。その他、1970年にクラクフ国際版画ビエンナーレで二席・ワルシャワ美術館賞、1977年にリュブリアナ国際版画ビエンナーレ(ユーゴスラビア)グランプリなど、受賞歴多数。
31
日記 1979年3月5日(b)
1979/昭和54年 721×428
木版、スクリーンプリント

パウル・ヴンダーリヒ Paul WUNDERLICH 1927-2010
ベルリン近郊エーベルスヴァルデ生まれのアーティスト。1947年にハンブルクの州立美術学校(現・ハンブルク造形芸術大学)入学し、在学中に版画の制作を開始。解剖学的なメタモルフォーズを加えた官能的な女性像や、自らインクを調合して作り出した独自の色彩の効果が評価される。1960年のマンハイム青年版画展でドイツ賞を受賞。1968年の第6回東京国際版画ビエンナーレ展で神奈川県立近代美術館賞を受賞し、日本の美術家にも大きな影響を与えた。
出品作はヴンダーリヒの代表作とされる版画集より。パリのデジヨベール工房で制作された。グレーやライムグリーンなど5〜7色のインクを刷り重ね、リトグラフの色価を研究した。
32
『ソロモンの雅歌』より
第1章第16節／ほんとにあなたも美しい、私の愛する人よ。／すてきよ、私たちの寝床は、緑の茂みよ。
1969年 599×448 リトグラフ
33
『ソロモンの雅歌』より
第4章第5節／君の二つの乳房は、二匹の子鹿、／双子のカモシカのように、百合の間で草を食んでいる。
1969年 599×448 リトグラフ
34
『ソロモンの雅歌』より
第7章第3節／君のからだは、ユリに囲まれた小麦の山。
1969年 599×448 リトグラフ
32〜34 個人より寄贈(小林一策コレクション)

アンディ・ウォーホル Andy WARHOL 1928-1987
1960年代のアメリカで興隆したポップ・アートを代表する作家。
本作は、ウォーホルが1970年代に制作した静物画群のうちの一作。その特徴として、1960年代と比べ、象徴的・伝統的な主題を扱ったことがあげられる。食器を描いた本作も、静物画の伝統的な主題との繋がりを感じさせる。同時に、セレブ文化や消費者主義へのウォーホルの強い関心が表れた作品でもある。パーティの直後に訪れる静寂を通して、華やかな生活の裏に潜む虚しさがほのめかされている。

35
After the Party
1979 年 554×773 スクリーンプリント

個人より寄贈

岡鹿之助 OKA Shikanosuke 1898-1978
東京出身の画家。東京美術学校西洋画科で岡田三郎助に学び、卒業後は 1939 年まで約 15 年間フランスに住んだ。帰国後は春陽会等で発表し、1964 年に日本芸術院賞、1969 年には日本芸術院会員、1972 年文化勲章を受けるなど洋画家として高い評価を得た。
版画は戦後になって取り組んでいる。出品作は代表作である油彩画《雪の発電所》と同年に制作されたが、本作では点描技法を駆使した幻想的な作品で、版画ならではの味わいがある。刷り師・女屋勘左衛門の協力によって制作された。

36
蛾
1956／昭和 31 年 210×150 リトグラフ

国吉康雄 KUNIYOSHI Yasuo 1889-1953
岡山県出身の画家。17 歳で渡米後、苦節を経てニューヨークのアート・スチューデント・リーグで油彩を学ぶ。モダニズムの画家としてアメリカ画壇での地位を確立し、1933 年からはアート・スチューデント・リーグで教鞭をとった。
1925 年にパスキンの誘いでフランスに滞在してからは複数回渡仏し、1928 年の滞在中にリトグラフをはじめた。以後継続的に版画を制作し人物、風景など多彩な作品を発表している。国吉は日米開戦後もアメリカに留まり、難しい立場に置かれながらもアメリカへの貢献を行う。本作はその日米開戦の年に制作された作品である。

37
ニューイングランド風景
1941／昭和 16 年 255×364 リトグラフ

菅井汲 SUGAI Kumi 1919-1996
兵庫県出身の画家。大阪美術学校で学び、阪急電鉄の宣伝課に勤務後、1952 年に渡仏。当初はアンフォルメルの影響を受けた抽象画を制作していた。1960 年代前半から、本作のように単純化した形態を鮮やかな色彩で描く『オートルート』シリーズで自身の画風を確立していく。こうしたダイナミックな事物の捉え方には、作品には愛車のボルシェを運転した時の疾走感が反映されている。
1955 年にはリトグラフをはじめ、スクリーンプリントも制作。油彩と並行して版画も数多く

発表した。1959 年の第 3 回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ、60 年の第 2 回東京国際版画ビエンナーレ（東京国立近代美術館賞）などに出品し、国際的にも高い評価を受けた。

38
青い太陽
1965／昭和 40 年 705×535 リトグラフ

39～28 中井公子氏より寄贈

石山直司 ISHIYAMA Naoji
1965 年生まれ
愛媛県新居浜市出身の版画家。愛知県立芸術大学、大学院修了後、本作で「神奈川県国際版画トリエンナーレ'98」準大賞を受賞、2000 年には第 11 回クラクフ国際版画トリエンナーレで受賞している。
2003 年から文化庁在外研修員としてフィンランドに滞在したことを機に、現在に至るまでユヴァスキュラ市を拠点に活動。エッチングとドライポイントによる緻密な描写で人物、自然、メカニックを描いた作品を発表している。

Nos.39-41 は「神奈川県国際版画トリエンナーレ」の受賞作品である。開催館であった神奈川県民ホールの休館に伴い、受賞作品の一部が当館に寄贈された。

39
WANDERING PRISONERS
1998／平成 10 年 1140×900
エッチング・アクアチント

フリオ・セサル・ペーニャ・ペラルタ Julio César PEÑA PERALTA
1969 年生まれ
キューバ・オルギン生まれのアーティスト。1984 年以降、エッチング、リノカット、モノタイプ、スクリーンプリントなど、幅広い技法で制作を行う。キューバ、アメリカ、スペイン、ベネズエラ、日本、フランス、イギリス、ポルトガル、中国、メキシコ、アルゼンチンのギャラリーや美術館で作品が展示されている。ハバナ・グラフィック実験工房の一員。
第 7 回ハバナビエンナーレ（2000 年）、サンファン・ラテンアメリカ・カリブ海版画ビエンナーレ（プエルトリコ・サンファン）、ハバナ・グラフィック・ワークショップ（共に 2001 年）などの受賞歴がある。出品作は、2001 年に「神奈川県国際版画トリエンナーレ」で大賞を受賞した作品。

40
現代のルンバ音楽家たち
2001 年 1250×1914 木版

張敏傑 ZHANG Minjie 1959 年生まれ
中国河北省唐山出身。中央美术学院版画専攻卒業。日本、中国等のコンクールで多数入賞し、本作で、「神奈川県国際版画トリエンナーレ 2001」特別賞を受賞している。
木版を中心に、スクリーンプリント、リトグラフを制作。東西名画の引用や群像を通じて中国の農村風景、歴史的記憶やトラウマを寓意的に描く。本作でも張ならではの群像表現を見て取れる。
これまで中国、香港、ポーランド、アルメニア、アメリカ、スペインで個展を開催し、第 18 回クラクフ国際版画トリエンナーレ（2017 年）を受賞するなど現在も国際的に活躍。中国美术学院（杭州）壁画版画部門で教鞭を執り、教育にも従事している。

41
現代のおもちゃ No.2
2000 年 1660×860 木版

39～41 公益財団法人神奈川芸術文化財団より寄贈

2026 年 1 月 6 日発行
町田市立国際版画美術館
〒194-0013
東京都町田市原町田 4-28-1
3,000 部作成、1 部あたりの単価 12 円
（職員人件費を含みます）